

送信に（笑）を多用する人のごとく切なき酔い醒め
なりき 谷岡重紀

メールやツイッタ―の文章に（笑）という記号を入れる心理。読み手になんとかアピールしたい切ないほどの切迫感、そんな思いを作者は読んでいるのだろう。二日酔いの歌の新工夫。

「妻の方がいい歌作つてみますよ」と竹山広言ひて
みたりき 馬場昭徳

今月のこの作者の八首は、竹山妙子さん（竹山広さんの妻）の歌集を編集している一連。同じ長崎歌会のメンバーとして、竹山夫妻と親しい交流があった作者。一首に引用された竹山広さんの人柄が表れたような発言に注目する。

雨に濡れ色濃くなれる碑の会津八一の陰刻の文字
金 有美

この作、意味内容がどうと言うよりも、まず、口当たりのよさというか、発音した時の舌触りのよさに感心した。五七五七七のそれぞれ最初が、五つとも母音だからだろうか（「碑」は「いしづみ」と読む）。

宙へ向かう大杉は発条を隠しおり数多の雪を一瞬に
落とせり 尾上 宏

杉の木に降った雪を、杉が身震いをする感じで振るい落とす瞬間。風がなくても何らかのバランスの関係で積雪すべてが一瞬に落ちるのだろう。歌にしにくい場面を歌にまとめた工夫。

犬と共にあるきし山ゆゑ猿・兎・鹿・雉子などに遇

短歌の現在

No.492 今月の15首を読む

佐佐木幸綱

ひしことあり

松田佐保子

今月の一連は、二十年近く昔飼っていた犬の思い出である。「共に百越す山に登りき」とあるから、ずいぶん遠い山もいっしょに登ったりしたらしい。昔の体験をメモのように軽く表現して淡彩の味わいを出している。私は足柄峠や愛鷹山など、数えるほどしか犬と一緒に山登りをしたことがないが、それでも犬独特の鋭い感覚にみちびかれて不思議な体験をしたことが幾度かある。

息絶えて重き骸の質感を描きてムンクの筆致執念し
菅原百合絵

ムンクの「マラーの死」と題する絵に取材する作。ムンクは百年ほど前に起こったフランス革命の重要人物・マラーの暗殺事件を、往時の絵を参考にしながら描いている。下句の「執念し」にはたぶん、絵がムンク自身の恋愛事件と関わっていたらしいといった背景をも読んでいいのかもしれない。

ヤンバル路カエルにクイナ・イボヤモリ棲物優先速
度を落とす 北見典子

ヤンバル路は、その地に棲むものが優先だから、カエルやクイナ、イボヤモリ等をおどかさないように、運転する自動車の速度を落とした、一首はそんな意味だと思う。小動物の名前を三つ出して特色にしている。「やんばる」は沖縄島の北部のことと、ネットにある。

おおかたはもう若からず黙々と雪寄せをする黒き人
影 佐々木寛子

この冬は雪が多くて、雪国の人はたいへんだったよう